「様々な面で成長した訪中」
1-B 神田外語大学　稲垣瑠琉

私は大学で中国語専攻であったことから、語学だけでなく、歴史や文化などにも興味があった。正直訪中前の中国のイメージは良くない印象が強かった。メディアの批判やネットに流れてくる情報が自分に対して悪い印象を与えていた。実際に中国に行くことで本当の中国を見ることができると思い今回の訪中を決意した。また、拙い中国語ではあるが、自分がどれだけ会話することができるのかも実践ができる良い機会であると感じた。

今回訪中した場所は、上海、四川、北京と誰もが一度は聞いたことあるような有名都市であった。自分の中で３つの都市でイメージできるものは料理であり、それぞれの料理を堪能できる事が楽しみであった。最初の上海では、テレビなどで見たことあるようなタワーが立ち並ぶ経済都市が広がっていた。天気はあいにくの雨であったが、それでも上海の経済力が伝わるような迫力ある光景であった。夜のクルーズでは雨が止み、見たことない美しい夜景を見ることができた。一つ一つのビルが美しく光り、上海の夜を明るく照らしていた。2 日目は上海博物館に訪れ、彫刻、青銅器などを通して中国の歴史に触れることができた。日本は中国の文化を受けて発展したと言っても過言ではないので、その起源を見れたことは非常に貴重な体験であったと感じた。飛行機が遅延してしまい時間ができたため、上海のディズニータウンで観光することができた。日本のイクスピアリ的な場所であり、ディズニーに行ったような気持ちを体験することができた。

四川では辛い食事のイメージが強かったので辛いものを食べれない私にとっては少し不安であった。火鍋は初めての経験であり、油をつけて食べることに驚いた。パンダ基地に行った際はパンダをじっくり見ることができたのが貴重な経験であったと感じた。上野動物園でパンダを見たことはあったが、止まって見ることができず可愛いパンダを見ることができなかった。そのため今回の経験はおそらく 2 度とない経験になったと感じた。考古探索体験では周りの方とたくさん話すことができ、班の人だけでなく他の班との交流もできた良い機会であった。2 日目は西華大学に訪れ、日本語や中国語で中国人と交流することができた。ゲームや漆扇子作り体験でたくさん話すことができ、自分の中国語を試せたことに加え、中国人の日本語のレベルの高さをしることができた。昼食ではパフォーマンスを披露し、前日に一生懸命練習した成果を存分に発揮することができた良いステージだった。歓声や手拍子などで自分たちの緊張が解れ、楽しむことができたと感じたとともに、班の絆がより深まったステージであったと感じた。北京行きの飛行機では班の人たちと近い席になり、会話したりゲームしたりと楽しく過ごすことができた。

北京 1 日目はレセプションがあり、改めて日中友好協会で研修をする素晴らしさ、日中関係を今後若者が良好に築く責任を感じた。万里の長城では長さに圧倒され、実際登った際も想像以上にきつかったが、教科書にあるような景色を見れたので満足だった。故宮博物院では圧倒的な広さと、細部まで細かく作り上げられていることに驚きをもった。

7 日間を通して、中国について知れただけでなく、団体行動の中での自覚を持った行動、班長としての責任感をより感じ、人間としても成長ができた研修であったと感じている。研修を通して得た交流や経験を今後の人生でも活かしていきたいと考えた。

「訪中を通して」
1-B 慶應義塾大学 梅田萌花

訪中を通して学んだことは多岐にわたりますが、特に中国の人々の暖かさと優しさ、誠実さに強い印象を受けました。
中国を訪れる前まで、私は中国人に対して偏見や先入観を持っていました。私が中国人に対して抱いていた偏見は、主に一部のメディアを通して得た断片的な知識から来ていました。中国人は自分第一で行動し、他人に対して優しくないイメージを持っており、特に、自己主張が非常に強く、他人の意見を否定する姿勢が強調される映像を思い浮かべていました。私は、これらの情報を一部しか見ていないにもかかわらず、それをすべての真実だと思い込んでいました。この偏見が間違いだったことに気付いたのは、訪中で多くの中国人と交流する機会を持ったからです。この訪中を通じて触れ合った人達との経験が、私の見方を大きく変えました。訪中する前、自分の心の中にはステレオタイプな視点がありました。「中国」という国を一つの枠に押し込めてしまい、その中の多様性や人間味を見逃していたのです。実際に中国に訪れて、人々の温かい対応や助け合う姿勢に触れることで、自分の先入観がいかに狭いものであったかを痛感しました。
西華大学に訪問した際、三人の女の子が私たちの相手をしてくれました。日本語を話せるのは一人だけでしたが、三人とも私たちの言葉を一生懸命理解しようとしてくれました。彼女たちは「雪の華」や「未来へ」といった日本の曲を知っており、一緒に歌ってくれました。その日本語はとても上手で、たくさん練習してきたことが伝わってきました。こんなに良い人達が日本のことを知ろうとしてくれていることがとてもうれしかったことを覚えています。
また、私が買い物するときに困っていたら、みんなが躊躇せずに手を差し伸べてくれたことも強く印象に残っています。現地のスーパーで買い物をしたときに微信 pay での支払い方法に困っていたら、後ろに並んでいた現地の方が、こうやればいいんだよと横から実際にやってみせてくれて教えてくれました。お土産屋さんでは、私が中国語を話せないことがわかると、英語や身振り手振りを使って伝えようとしてくれました。
この訪中を通じて得た学びは、個々の出会いから生まれるものであり、国や文化を超えた人間同士のつながりがいかに大切かを再認識させてくれました。多くの人が国という大きな括りで他者を判断しがちですが、実際は、一人ひとりと向き合い、その人の個性や背景を理解することが何より重要であるということに気付かされました。この体験から学んだことは、個々の違いを尊重し、国籍や文化にとらわれずに相手と真摯に向き合うことがいかに重要であるかということです。
中国で出会った多くの人々との交流は、国の枠を超えた深い結びつきを感じさせてくれました。中国の友人たちは、自国の文化や価値観を誇りに思いながらも、私たち日本人に対して温かい心で接してくれました。彼女たちとの会話や交流を通じて、国籍や文化の違いは障

害ではなく、むしろ相互理解の糸口になることを実感しました。
これからの世界は、私たち若い世代が担っていくものです。私たちの代で偏見を終わらせ、国籍や文化に関わらず互いを認め合い、支えあう社会を実現することが求められています。個々の違いを尊重し、真摯に向き合うことで、私たちはもっと強い結びつきを築き上げることができるのです。今回の訪中で確信を得たのは、それが決して難しい話ではなく、実現可能であるということです。この経験を通じて、国や文化の違いに関係なく、互いの違いを尊重し合い、理解し合うことの大切さを深く感じました。それは単なる理想論ではなく、実現可能な目標です。私たちはこれからも、この価値観を持ち続け、より良い社会の実現に向けて積極的に行動していく必要があります。
最後に、今回の訪中を企画・運営してくださったすべての方々に、心より感謝申し上げます。

「肌感覚で中国を感じてみて」
1-B　横浜国立大学　江田渉吾

中国に初めて触れたのは小学生くらいのときだったと思う。テレビで朝早くからやっている中国語講座の番組を録画し、中国語の基本的なフレーズを覚えた。当時、漢字を習いたてだった小学生の私にとって、日本ごとは異なり全ての文字が漢字であることが面白く思っていたことが記憶に残っている。また、中国語の音の調べが素敵だと思ったのもその番組を視聴していた理由の 1 つである。時は流れて大学生になったとき、中国語を習得したいという気持ちが改めて湧き上がってきた。それからというものの、たまに中国のドラマや映画を観るようになったり、中国で普及しているアプリをインストールして中国留学生と中国語でコミュニケーションをとってみたり、デジタルを介して中国に接近するようになっていった。これを受けて、私は今回の訪中団で、デジタルのみで構築された自分の中の中国像と実際の中国のギャップを肌感覚で掴みたいという目標を掲げた。

上海の黄浦江クルーズには度肝を抜かれてしまった。今まで東京という世界有数の大都市の夜景を見てきたため、自分は夜景に関しては比較的目が肥えており、上海の夜景と言えどもさほど驚愕することはないだろうと思っていたが、建物に映し出される広告のあまりの派手さ、街の規模感に思わず口を開けてしまった。日本の夜景とは少し異質な感じがして素敵だった。看板の文字がほとんど全て漢字だったため新鮮に感じられた。これは上海に限ったことではなく、北京の万里の長城を上ったときも同じく中国の古来の建造物のいかに大規模であることかを目の当たりにしたし、四川で火鍋を食べたときも豪華絢爛な装飾と来客用パフォーマンスが充実していることに驚かされた。このようなスケールの大きい、派手で、大胆なことに中国は長けていると思うし、私も中国のそのような点が好きである。訪中前後の中国に関するイメージに関しては、今回の渡中前から中国の留学生と交流する機会がたくさんあったので、訪中後での中国の人々に対するイメージは正直あまり変わらず、親切なイメージのままだった。しかし、実際に中国の地に降り立ち、施設や景色、街の雰囲気といった、彼らのバックグラウンドを肌感覚で経験することができたことで、中国で生まれ育った彼らが一般的なものとして受け入れている生活の視座が以前よりも深く了解できるようになったと感じる。今回の訪中団が私にとって初めての海外渡航の経験であったということも関係していると思うが、少なくとも私は中国から帰国した際に、自分が今まで当然だと思っていた日本の何気ない景色を見ると新鮮に感じられるようになった。これは今まで無意識に普通だと思っていた景色や感覚が日本独自のものであることに気づいたことに関係しているだろう。また、1 週間という比較的長い期間中国にいたことで自分にとっての日本の好きなところも嫌いなところに関してより一層明確に分別がつくようになった。今まで他の人が他国から帰国した際に自国の利点欠点を再認識するようになるという話は耳にしたことがあるが、実際に自身が体験するのはこれが初めてである。

中国に実際に足を踏み入れたことで、以前よりも彼らの目線に立って物事を理解するこ

とができるようになったと思う。また、訪中団を通じて上海、四川、北京の 3 都市を巡っていったわけであるが、更に中国での生活に関心が高まり、現在は中国に留学することを前向きに検討している。

「今日、私が中国で見た景色」
1-B　慶應義塾大学　岸本真歩

中国はなんだか怪しいし、街中の中国人はいつも大声で怒っている。看板や標識は意味のわからない漢字だらけで、本場の中華料理は美味しくない。約 8 年前、当時中学生だった私が、家族で中国広州へ訪れた際に抱いた感情だ。
高校と大学で中国語や中国政治を学ぶ環境に恵まれた。中国について考えることはあっても、実体験としてあるのは中学生の時に抱いたあのイメージ。決して良い印象を持っていなかった中で、今回の訪中団に参加した。今日まで学んだ知識を持って、中国をどう捉え、どう感じることができるのか、自分自身への興味を持って臨んだ。
一週間の行程で上海、成都、北京の三都市をめぐった。印象深かったのは、各都市の街並みである。まず初めに訪れた上海。ナイトクルーズは圧巻だった。上海テレビ塔をはじめとする浦東の煌びやかなライトアップは、目を見張るものがあった。名の知れた企業名を掲げるビル群を見上げ、経済都市を実感した。対岸の外灘エリアは古い洋式の建造物が温かな色に染まり、心奪われる景色であった。
次に移った成都は、日本を上回る国土をもつ四川省最大の都市である。成都の街並みは、上海よりも私が思う中国らしさを感じた。整備された 4 車線の道路、人民広場の大きな毛沢東像、お店の様子がなんとなく私が描いていた中国像と似ていた。三星堆博物館付近は建設途中の工事現場を何箇所も目撃し、郊外は開発途上であることが窺えた。
最終目的地である北京では、さすが大国中国の首都だと感じるスケールの大きな建造物が立ち並ぶ場所と、二環路の内側が保護されているという古き良き街並みが維持される故宮付近の対比が面白かった。私は故宮付近の街並みが非常に気に入った。
中国の街並みを眺めて、日本とは違う「異国」を感じる一方、なんだか日本と似ているなと親しみをもつことができたことが、今回の訪中の一番の収穫だったように思う。中国語の勉強の成果で、街の中国人が話していることをなんとなく聞き取れたことで、会話の内容を推察できた。彼らは語気が強いだけで、怒ってはいない。例えば万里の長城では、疲れた、トップまで遠すぎるなんて言っていた気がする。看板に書いてある意味のわからなかった簡体字も、読めた。中華料理は慣れない味付けや食材に苦戦しながらも、興味をもって挑戦して食べることができた。代表団としてのもてなしを受け、たくさんの「謝謝」の言葉をもらった。現地の大学生は、日本と特別変わらない。こうした一つ一つの経験と自分の思いで、以前中国へ訪れた際はマイナスだった印象を変えることができた。
この広大な土地で、今日も 14 億人の暮らしがある。実際に自分の目で見て、自分の肌で空気に触れて、言語を通して人と触れ合うことで生まれた、素直な思いである。それこそが私が中国で見た景色であった。百聞は一見にしかず、を身をもって体感した。
大学生の今、訪中を経験できたことが私の人生の財産になり、今後の人生の糧になるだろうと強く思う。

「カラフルな中国」
1－B　福岡女子大学　坂口綾音

初めての中国訪問。溢れんばかりのワクワクと少しの不安を胸に成田空港を離れた。私は、中国語という言語から中国とのつながりを感じ始め、その後徐々に厳格かつ華やかな中国の世界観に興味を抱いていった。大学の授業、ニュース、中国からの留学生。両国がお互いにマイナスな印象を抱いていると考えざるを得ない情報もあれば、日中の長く深い歴史から築かれた親密な関係性もあると考えていた。実際の中国はどのようなものか、自分の目で確かめたかった。そして、今後の日中関係を考えるきっかけにしたかった。

まずは上海へ。上海センタービルで計画経済を想起させる住宅街を見ることができた。また、クルーズ船でひたすら煌びやかな世界を楽しんだ。経済の中心を担う都市として、更なる発展が期待できる中国の明るい未来を最大限に表現しているように感じた。次は四川の成都へ。街中の至るところにパンダがいた。今まで小さくて可愛い存在と思っていたがが、飼育の大変さや外交も担う重圧の大きさに偉大な動物だと認識を改めた。また、西華大学では現地大学生と伝統の漆扇子を作ったり、一緒に歌ったりして素敵な関係づくりができた。最後は首都の北京へ。条坊制のまっすぐな道に私たちも含め観光客がたくさんいた。しかし、一歩裏の路地を覗くと、静かで穏やかな日常が送られていると感じた。観光地となっている歴史的建築物だけでなく、すぐ隣にある人々の生活も尊重されているのだろうと思った。そして、最も印象に残ったのは紫禁城である。壮大で迫力満載だった。焼失した部分も綺麗に修繕されており、当時の厳かな様子がヒシヒシと伝わってきた。皇帝としてこの場所に住むことは本当に幸せだったのか…とふとその生活を想像してみたが、皇帝にしか味わえない幸せと苦悩があっただろう、と結論づけた。皇帝を敬うように細部までこだわり抜かれた造りは見ていて楽しかった。

同じ中国でも、その都市によって街の雰囲気や食文化などのたくさんの違いがあり、面白かった。一方、観光地での事前予約制度やセキュリティの厳重さ、面子を重んじる習慣といった共通の文化も体感することができた。何より、中国側の歓迎ムードにホッとした。多くの人たちが日本を良くないように思っているのではないか、と渡航前は不安だったからだ。しかし、プログラムで関わってくれた人たちはもちろん、街中で私たちに興味をもって話しかけてくれた中国の人たちとも出逢い、交流することで、良好な日中関係の可能性に気づけた。これは実際に中国へ足を運び、積極的に関係づくりに励んだからこそ感じれたことだと考える。そして、このような小さなつながりがやがて国交関係を左右する大きな力になり得ると感じた。有難いことに、今回は招待という形で食事や滞在などで素晴らしいおもてなしを受け、不自由なく過ごした。しかし、一週間の豪華な滞在だけでは、まだまだ中国の真の面白さに辿りつけていないと考える。中国についての理解を深めるべく、次はよりローカルな

場所に飛び込みたい。多角的視野を持ち、カラフルな中国を存分に味わおうと思う。そして、日中関係のこれからを担う若者として、何をしたいか、何ができるかを探求していく。

「はじめての中国で感じたこと」
1－B　岩手県立大学　佐藤準武

私は今回，経済的にも文化的にも世界をリードしている重要な経済大国である中国の，文化や言語を理解することが将来グローバルに活躍するための重要なスキルにつながると考え，訪中団への参加を決断した．また，中国という国は私にとって距離や政治問題から気軽に足を運べる国だと思っていなかったため，一生に一度しか行くことのないかもしれないこの機会を逃したくないと思い，参加した．

1日目に訪れた中国最大の経済都市である上海では，黄浦江クルーズ船が最も印象に残った．クルーズの開始直後から私は街並みの壮麗さに圧倒された．数多の銀行や東方明珠タワーなどの高層ビルが立ち並び，色とりどりの広告やライトアップされた街並みは，未来を感じさせるほどのものであり，日本では見ることのできない光景だと思った．中でも，ヨーロッパ風の歴史的なエリアは近未来的な雰囲気が漂う中異質な雰囲気を醸し出しており，一層輝いているように見えた．この黄浦江クルーズ船には機会があれば一度は乗るよう強く勧めたい．

次に訪れた都市，成都の街並みはアパートやマンションらしき建物や飲食店やスーパーが多く，上海に比べリラックスした雰囲気が感じられた．成都での 1 番の思い出は成都にきて二日目の夜に食べた火鍋料理である．私は，火鍋を食べた経験がなく，中国に来たら是非たべてみたいと思っていた．実際の火鍋は，日本でいうしゃぶしゃぶに近く，辛いスープと辛くないスープがあり，そのどちらか好きな方に具材をくぐらせ，自分で調合したたれをつけてたべるというものであった．テーブルの中央にあるため，皆が席を立ちながら手を伸ばし，互いに火鍋の辛さを共有することで，旅の仲間との距離が一気に縮まり，自然と仲間との絆が深まったように感じられた．現地の方の歌や踊りなどの素晴らしいパフォーマンスを見ながら，和気藹々と食卓を囲んだあの時間は決して忘れることはないと思う．

最後に訪れた都市，北京ではあの万里の長城に訪れた．高校時代には地理を専攻していたため，中国について深く知識があったわけではないが，そんな私でも万里の長城と聞けばなんとなく教科書の写真が頭に浮かんでくる．実際に登りはじめると現代に比べ，一段一段の段差が非常に高く，古代の人々がどれだけの労力をかけてこの壮大な建築をつくりあげたのか考えさせられた．段差や傾斜が多いため，体力的に非常にハードではあったが，仲間と共に最後まで登り切った達成感は格別であった．

今回の旅をきっかけにきづいたことが 1 つある．それは中国人が謝謝(ありがとう)をよく使うという点である．飲食店の店員の方も，飛行機で隣にすわっていた方もよく謝謝と話してくれた．私は，高校時代に中国人の友人がいたからか，中国や中国人に対して特に嫌いなどネガティブな感情はもっていなかった．しかし，そんな私でもメディアなどを通し中国人は荒々しい印象があったため，この礼儀正しい姿勢には衝撃を受けた．また，1週間中国に身をおいたことで，国が違えど同じ人間ということを痛感させられた．食事をし，会話を

し，働き，勉強するなど，住む場所や文化は違っても同じ人間なんだと温かい気持ちになった．

最後にこの旅で感じたことは家族や友人にたくさん伝えたいと思ったし，もし同じような参加の機会があれば自分はもちろん，友人にも強く勧めたいと思った．また将来改めて中国に訪れた際は中国語で会話できるよう中国語の勉強もしたいと思う．

「中国での出会いと学び」
1-B　神田外語大学　関涼菜

私は 2024 年日中友好大学生訪中団第二陣の一員として初めて中国を訪れました。大学では中国語を学んでいましたが、実際に中国を訪れたことはなく、学んでいる言語を公用語とする国がどのような国なのか、自分の目で確かめたいという強い思いがありました。また、言語としての中国語だけでなく、コミュニケーション手段としての中国語、現地で使われる中国語に触れたいという思いで訪中団に参加しました。
訪中団として活動した 1 週間は、毎日新しいことに触れ、非常に良い刺激を受けた 1 週間でした。今回の訪中団では、万里の長城や紫禁城、三星堆博物館など中国の歴史的な場所だけでなく、成都パンダ繁育研究基地など、日本との関わりを感じられる場所や、上海の近代的な街並みといった、さまざまな角度から中国を体験することができました。
特に印象的だったのは、西華大学の学生との交流です。限られた時間でしたが、実際に中国で生活している同世代の学生と一対一で対話する時間は非常に有意義なものでした。大学を訪れる前は、共通の話題があるかどうかもわからず、どのような会話をして良いか不安でした。しかし、互いの国の好きなアーティストやアニメといった共通の話題を話していると、まるで昔からの友人のように会話が弾みました。住んでいる場所が違っても、好きなものが同じであれば、文化を超えて心が通じ合う瞬間があることを実感しました。また、私たちのパフォーマンスに彼らが興味を持ち、楽しんでくれたことも心に残りました。言葉が完璧でなくても、お互いの文化に対する関心やリスペクトがあることで、会話や交流がより深く、豊かになることを強く感じました。
この交流を通して、中国語を学ぶ意義がさらに大きく感じられました。また、言語を超えて人と人とのつながりを築く力を改めて実感しました。中国を訪れるまでは、中国を一つの「国」としてしか捉えておらず、日本のメディアから伝えられる否定的な情報を多く吸収していたため、中国で生活する人々について深く考えることはありませんでした。しかし、この訪中団で中国を訪れ、現地の方と交流したことで、国としてではなく「個人」として隣国・中国と向き合い交流することが、今後の日中友好につながっていくのではないかと感じました。もちろん、今回訪れた場所は有名な観光地であり、友好団体の方々が準備してくださった場所であったため、中国全体を見たわけではないかもしれません。しかし、まずは今回の大学生交流で出会った中国の若者たちとの関係を大切にし、これからも交流を続けていきたいと考えています。そして、少しずつその輪を広げていくことで、さらに日中友好を深める活動に繋げられると信じています。
また、訪中団に参加した学生たちは全国から集まっており、普段の生活では接点のなかった中国に関心を持つ他の学生たちと交流する貴重な機会となりました。中国での生活を通じて、日中関係や日本についての議論など、さまざまな問題について話し合うことができました。互いの意見を主張するだけでなく、尊重し合いながら議論することで多くの学びがあり、

班としての絆も深まったと感じています。さらに、彼らとの交流を通じて、外交や政治といったこれまであまり関心を持っていなかった分野にも興味を持つきっかけとなりました。
このプログラムに参加したことで、大学で学ぶだけでは得られない体験をし、多くのことを学ぶことができました。この訪中団での経験は、私の人生において大きな宝物となりました。
今回見た中国がすべてだとは思わず、これからも中国に関心を持ち続け、学びを続け、日中友好の架け橋となれるよう努めていきたいと思います。
最後になりますが、佐々木団長を始め、日中友好協会、中日友好協会、中国政府、そして 2024 日中友好大学生訪中団のためにご尽力いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

「訪中を終えて」
１‐Ｂ　藤女子大学　西田咲京

訪中前、私の中国に対するイメージは今までの学校教育で学んだ内容やメディアから得られた情報ごく表面的なもので形成されてしまっていたように思います。だからこそ、今回の訪中ではこのような機会を頂けたことに感謝をしながら、自ら自分の目で確かめ、肌で感じ、自分なりに中国という国を捉え、改めて日中関係について考えていきたいと考え、参加しようという思いに至りました。
1 日目上海の街に足を踏み入れた途端、とても個性的な高層ビルの数々、車線や車、電動バイクの多さにとても驚きました。この街並みから急速に発展を遂げ、経済的に裕福である中国の一面を垣間見ることができました。また、街中の至る所で見かけたシェアサイクルや電気自動車、街路樹の多さからは、環境面にも配慮した政策が積極的に推進されているということが感じられました。これまで環境面での中国の印象は、大気汚染や二酸化炭素の排出量が多く問題となっているイメージでした。特に環境面に関しては、メディアでの報道はネガティブな内容として触れられていることが多いですが、実際に訪中することで実際の環境問題の裏で行われている取り組みにも目を向けることができたと感じます。急速な経済発展を感じた一方で、上海博物館や三星堆博物館での陶磁器や青銅器の展示や故宮博物館の建造物などから中国の文化や文明等の歴史の壮大さを感じ取ることができたと思います。更に、当時の皇帝が強大な権力を保持していたことが伺えました。
西華大学や中国传媒大学の学生との交流や現地のスーパーでの店員さんとのやり取りからは沢山の温かな優しさに触れることができました。西華大学の学生との交流で昼食会場でのパフォーマンス発表がありました。出番が近づくにつれ緊張していた私たち班員に対して、西華大学の学生が「大丈夫だよ」「頑張ってね」と優しく声を掛けてくれたことがとても印象に残っています。現地のスーパーの店員さんとは直接的に言葉でのやり取りはしていませんが、会計の様子を見守ってくれている様子から優しさを感じ取ることができました。このように言葉にならない言葉であっても、心理的な距離を縮めていくことができるという実感を得たと同時に、このような小さな優しさの積み重ねが日中友好の礎となっていくのではないかと感じました。
今回の一週間の訪中を通じ、実際に自分の目で見ること、肌で感じることによって表面的ではなく、一歩踏み込んだ状態での中国を理解することができたと思います。その一方で、今回訪れた上海、成都、北京の三都市は広大な大地を有する中国にとってほんの一部に過ぎないと感じました。この経験とご縁を大切に、今後は中国に対する学びを継続的に深めていくと共に自分自身でできることは何かを様々な角度から考えながら日中友好の一助となれるよう努めていきたいです。
最後に、今回このような大変貴重で素晴らしい機会を設けてくださった日中友好協会の皆様、中日友好協会の皆様、観光協会の皆様、ガイドの皆様、温かく迎えてくださった現地の

方々、関わってくれた全ての団員、そして何より７日間行動を共にしてくれた１Ｂの班員の皆に心より感謝の意を申し上げます。本当にありがとうございました。

「大学生訪中団第２陣事後レポート」
１－Ｂ　横浜国立大学　野村涼太

【初めに】
私は今回の大学生訪中団への参加を通して、中国の食文化や文化の多様性、歴史的な遺産や先進的な発展など、様々な分野について理解を深めることができました。中国の上海、四川、北京の各都市で得た経験をまとめます。

【食文化について】
中国の食べ物は非常に多様で、地域によって様々な特色がありました。四川料理の辛さや、広東料理の繊細な味付け、北京料理のような伝統的な料理まで、どれも独自の魅力があります。しかしその多様な料理の中でも特に、四川料理で食べた火鍋が印象に残りました。様々な香料や香辛料を使用した強烈な辛みとどこか癖になる味は、中国に行かなければ味わえない体験でした。
また、中国ではもてなしの際に相手が食べきれないほどの食事を出すことが礼儀であり、もてなされた相手は食事を残すことがマナーであるという文化を体験して、とても驚きました。西華大学の学生にその伝統について尋ねてみたところ、この伝統には多くの社会的側面に基づいていることがわかりました。多くの料理を用意することで、もてなしの心を示し、ゲストに対して「十分な食事」を提供するという意図があります。これが、料理が残ることを許容する一因となっていると話してくれました。残った料理は、翌日や後で再利用するために保存されることが多いため、中国では多くの家庭で余った料理を冷蔵庫に保管し、次の食事に使うことが一般的であるそうです。

【歴史的遺産について】
　更に、長い歴史を持つ中国には万里の長城や紫禁城などの歴史的な遺産や、青銅器、陶磁器などの歴史的な遺物がたくさんありました。日本の江戸城や京都の街並みとは違う外国の遺産を実際に目の当たりにすると、その規模や壮大さに圧倒されます。日本に伝わったとされる数々の技術のルーツが中国にあると聞いて、その文化がもたらした影響の大きさにとても驚きました。

【先進的な発展について】
中国は味わい深い歴史がありますが、先進的な技術や街づくりも深く心に残りました。特に都市部では、近代的な発展が著しく、摩天楼やハイテク施設が立ち並んでいます。例えば、上海でクルーズ船に乗り、夜景を眺めた際は、世界的にもトップクラスな現代都市をこの目で見て、日本と何が違うのか、どこが同じなのかを考えることができました。
また、中国は広大な国で、地域ごとに建造物の様式が大きく異なります。例えば、北京の歴

史的な建築物や、上海の近代的なスカイライン、広州の活気あるマーケットなど、それぞれの都市で異なる顔を見ることができました。

【大学生との交流について】
訪中の期間のなかで、西華大学と中国コミュニケーション大学の学生たちとお話しする機会がありました。学生たちは一般的に親しみやすく、温かいです。彼らと交流することで、彼らの文化や生活に対する深い理解が得られました。また、彼らも日本のことについて強い興味を持っていました。

【終わりに】
　私にとってこの旅はとても興味深く、楽しく、自分の学びのためになる最高の体験でした。もともと抱いていた中国への興味はより強く、より発展的なものへと昇華して、中国語を学びたいという思いは一層強くなりました。次に中国に渡る際は、中国語を学び、中国の文化をさらに理解して、中国の人々とより親密に話したいと思います。

「やはり百聞は一見に如かず」
1-B 静岡県立大学 間蔵裕亮

友人間との会話や企業での面接等、人とのコミュニケーションの過程でよくあるものの一つとして、「あなたの座右の銘は何ですか。」という質問がある。個人的にこの質問は各人の個性が色濃く出て非常に興味深いものであると感じている。ちなみに、私の座右の銘は「百聞は一見に如かず」である。理由としては、長い人生において、人から聞いたことよりも自分の目で見たものを信じたいという思いからである。今回、この言葉が生まれた中国への訪問を通して言葉や文化、歴史などの多くのことを自分の五感を通して体感できたことで、やはり私の座右の銘は「百聞は一見に如かず」であるべきだと感じることができた。

訪中前、自分や周りの中国に対するイメージはどういうものなのか考えてみた。当たり前の話であるが、日本人である私が海外の情報を仕入れる際、日本のマスメディアが作成するニュース記事や SNS などのインターネットを通じて情報を入手することがほとんどである。そんな中で、中国に関する情報に着目してみると、「中国共産党」「習近平」「社会主義」「台湾問題」といったキーワードがよく使われ、それを批判するようなことが多く書かれているものをよく目にしていたことから、はっきり言って中国に対する印象は良いものではなかった。

しかし、今回の訪中はそんなイメージを大きく覆してくれた。1 週間の日程を通して私たちは多くの場所を訪問したり、体験活動を行なってきたことで、中国の文化や歴史、発展した経済を感じることができた。特に、1 日目の黄浦江クルーズ船では上海の高層ビル群が織り成す絢爛な夜景を一望することができ、もの凄い勢いでアジアの大国となった中国経済の大きさを肌で体感することができた。また、6 日目に訪れた万里の長城では全体のほんの一部しか巡ることができなかったが、長い中国の歴史やその壮大さを身をもって体感することができた。

また、何よりも特筆すべきは、人の優しさである。今回の訪中では、私たちは多くの現地の方々にお世話になった。それぞれのバスにはずっとガイドの方がついてくれ、移動中は現地の情報や行き先に関する歴史を教えてくれ、中国に対する理解をさらに深めるための大きな存在であった。また、4 日目に訪問した西華大学では日本語を学ぶ中国人大学生たちは皆明朗快活で、明るくコミュニケーションをとりながら中国の伝統文化を教わり、体験することができた。自分は中国語を話すことができないため、訪中前は現地の人々とのコミュニケーションに関して不安であったが、彼らの優しさや態度を目の当たりにし、訪中前の不安は気づけば無くなっていた。自分は大学でコミュニケーションについて学んでいるが、何よりも大切なのは言語ではなくお互いに歩み寄ろうとする姿勢なのであると今回の訪中を通して学ぶことができた。

今回の訪中を通して、自分の世界が大きく広がったように感じる。しかし、大切なのは自分の世界を広げて終わるのではなく、この世界を多くに人に拡散することである。昨今、世

界は多くの問題を抱えており、世界は今一度互いを理解し合うことが求められているが、それは国家間の話にとどまるわけではなく、これからの世界を作っていく私たち若者が担っていくべきものであると感じている。現在の日中関係は緊張感を持つものではあるが、今回の訪中で得た経験を活かして日中関係のさらなる発展に尽力していきたい。

最後に、今回の大学生訪中団に関わってくださったすべての方々に感謝して本レポートを締めたいと思う。

「訪中を終えて」
1B 神戸市外国語大学 松浦紗奈

私は大学に入学してから約 1 年半中国語を勉強しているが、中国に行ったことがなかった。しかし、中国語を勉強しているからには、中国を訪れて、実際の中国の様子を自分の目で見てみたいと思い、訪中団に参加した。
まず上海に着いて、上海タワーで流れていた動画を通じてこの約 30 年間で上海がどれほど飛躍的に発展してきたのかを学んだ。その後、展望台やクルーズから街にあるビルの多さ、そして煌びやかな夜景を見て、それを実感した。次に四川では、西華大学で伝言ゲームや漆うちわ作り体験を通して、中国の学生と交流することができた。西華大学の学生は流暢に日本語を話しており、相手と同じ言葉が話せると伝えられることが大幅に増えるということを改めて実感し、中国語を習得することへのモチベーションがさらに上がり、文化や言語に対してより興味を持つきっかけとなった。北京では、万里の長城や紫禁城の訪問を通じて、中国の歴史や建築の壮大さと誇りを感じた。特に紫禁城では、ガイドさんが橋や道、時代背景の説明をしながら進んでくださったため、理解を深められた。
私は今回の訪中を通じて、訪問して実際に体験することの大切さを痛感した。訪中前、ニュースや大学の授業で得た知識から中国での生活に対する主なイメージとして、キャッシュレス、制限が多いなどをもっていた。この印象は、渡航前に連絡や決済の手段として「微信」をダウンロードするなかで強まっていった。中国で過ごした 1 週間、キャッシュレス化が日本とは比べ物にならないほど進んでいるとは感じたが、制限があると思うことは特になかった。例えば、「インスタグラム」が使えなくても「微信」で写真とコメントを上げられる機能があるため、日本と使用しているアプリが異なるだけで、使用方法やタイミングはほとんど同じであった。
また、中国を訪れた経験がある方から聞いたことがあったように、中国人の親切さを感じることが多かった。ホテルやレストランでうまくコミュニケーションが取れないこともあったが、ジェスチャーを使って笑顔でお手洗いの場所を教えてくれる方、暑いからと髪ゴムを配ってくれる方、フロアが違うにもかかわらず目的地の近くまで案内してくれる方がいた。これらの出来事によって、日本で得ていた情報だけでは本当の意味で中国の社会や生活を知ることは難しいと改めて感じた。一方で、現地での生活などを体験したことがある人の話には、実際の社会や生活をかなり鮮明に想像できるという良い点に気づくことができた。そのため、今回私が体験したことを身近な人に話すことで、中国に行ったことがない人にも、私が実感した中国の良い所を知ってもらえることができ、さらなる日中友好の実現に貢献できると思った。
そして、班のメンバーと出会えたことも、訪中団に参加できて良かったと思う理由の一つだ。それぞれ知識が豊富で話していて勉強になることが沢山あり、人間性も尊敬できる部分が本当に多かった。特に、中国語を使って中国人とコミュニケーションをとる姿や周りをしっ

かりと見て落ち着いた対応をとっている姿が印象的だった。
残りの大学生活で、日中友好について考えるとともに、様々な点において成長したいと強く思った。
最後に、このような貴重な体験をさせてくださった関係者の皆様に感謝申し上げます。旅行でもツアーでも、到底 7 日間では経験することのできないほど濃い内容で毎日新鮮な気持ちでした。ありがとうございました。

「自分にとって中国とは」
１-B　藤女子大学　柳原咲楽

自分は最初、インターネットやニュースで流れる中国の情報を視聴して、正直中国に対してあまり良いイメージを持っていなかった。そのため、訪中団に参加するかどうかかなり悩んだが、自分の中で行ったこともない国に対して偏見でしか物事を判断できないのは決して褒められることではない、また、実際に中国に訪れることで自分の視野が広がり、何かを得ることはできるだろうという思いがあり、大学の第二外国語の授業で中国語を選択していたこともあって、今回の訪中団に参加した。
まず、上海での滞在で一番驚いたことはクルーズに乗ったときに見た夜景である。自分の出身地は北海道であり、百万ドルの夜景と言われている函館に何度も訪れたことがある。そのため、美しい夜景には慣れていると思っていたが、展望台などの高いところから見る夜景よりも、高層ビルや建物のライトアップを地上と同じ目線から見る夜景にとても感激した。黄浦江から見る夜の上海の美しさはとても言葉に出すことができず、まるで別世界にいるような時間だった。中国の国家中心都市の一つである上海は経済発展の象徴とされていて、あらゆる産業、金融、交通において盛んだといわれているということは知識としてなんとなく頭には入っていたものの、実際に自分の目でそれを確認してみて中国の良さを知ることができた嬉しさと、感動の気持ちが胸いっぱいに広がった。
次に訪れた成都では中国の歴史に触れることができた。自分が高校生の時、世界史を選択していたため、中国の王朝の流れは理解しているが、三星堆博物館で蜀の時代の出土品の展示を見て、その時代の人々がどのような生活をしていたかを勉強することができて、世界史に実際に触れることの楽しさを知った。また、ジャイアントパンダの繁殖施設に行って、パンダを見ることができてとても楽しかった。生まれて初めて見たパンダは、クマ科とは言っても、クマとはまた全く違う生き物のように感じた。昼食の際に、団長の佐々木さんが札幌の円山動物園にパンダを呼ぶ計画を立てようとしたものの、パンダは繁殖が非常に難しく、現代の動物園は動物を見世物にする場所ではなく、研究施設であり、個体管理に専門家や獣医を入れたチームを作らなければならないため不可能であるという話を聞いて、動物に対する見解が自分の中で変わったことに多少ではあるが成長を感じた。そして西華大学の学生との交流はとても楽しく、中国の伝統的な文化について学ぶことができ、班のみんなと作り上げることができたダンスとオタ芸のコンビネーションパフォーマンスが訪中団の人にも西華大学の学生にも好評だったため、達成感を感じることができた。
最後に訪れた北京では建造物の規模にとても驚き、感動した。紫禁城では三星堆博物館よりも中国史を近くに感じることができ、約８００年前の明の時代の建造物が建て直しや工事を繰り返しながらも、現代まできれいに残っていることにとても感動した。竜の紋章が紫禁城のいたるところにあったが、それが王の象徴であることにもとても驚いた。また、万里の長城の長さに圧巻された。現代の発展した技術でも二万キロ以上の建物を作るのも気が滅

入るような話なのに、機械もない春秋戦国時代から明の時代まで約二千年をかけて造ったという事実があることにとても驚いた。世界遺産に訪れることのできた喜びと感動がとても強かった。
また中国の食事で本場の中華料理を味わうことができて嬉しかった。日本とは味付けが違うものが多かったが、口に合うものがたくさんあり、とてもおいしかった。特に自分は四川で食べた火鍋がとても気に入ったので、日本でもぜひおいしい火鍋の店を見つけて、食べたいと思った。
今回の訪中団を経て、中国に対する印象がガラッと変わった。想像していたよりも中国人はとても親切でユーモアにあふれている人ばかりだったので、交流するたび、とても楽しい時間を過ごすことができた。日本には自分のように中国に対してよくないイメージを持っている人が多いと思うが、そんな人にこそぜひとも訪れてほしい国であるなと思った。そして訪中団で得ることができたモチベーションを生かして、中国語を今以上に勉強し、中国史についてもたくさんの知識をつけ、たくさんの人に自分が感じた中国の魅力を理解してもらい、興味をもってもらえたらいいなと思った。

「中国留学に向けて」
1-B 慶應義塾大学　和澤優太

私は三年以内に達成したい一つの目標を持っている。それはダブルディグリープログラム（現在の私が通っている大学と北京大学、双方の学位を得ることができる制度）を用いて、北京大学へ留学することだ。北京大学で、世界中から来た優秀な学生たちと切磋琢磨しながら、停滞気味な日本経済を復活へと導くようなリーダーシップを学びたいと考えている。
私は中国へ留学するのに必要なスキルを把握し、自分に足りない部分を認識するために訪中団への参加を決めた。今回中国に滞在する中で、いち早く中国語を身につけなければならないと感じた。事前研修会で、第一陣に参加された方が「英語は全く通じない。」とお話しされていたが、「そこら辺の日本人よりは話せるだろう」と軽く考え、進んで中国語を学習する意欲は無に等しかった。しかし、いざ行って英語で話しかけてみると驚愕の事実に気づいてしまった。対応がそこら辺の日本人と変わらなかったのだ！みんな「No」、「No English」としか言わない。外資系のシェラトンのスタッフさえ翻訳アプリを繰り出してきた。トイレの場所も知ることができなかった。「洗手间在哪里？」と聞いても、理解不能な中国語で返されるだけだった。北京大学での授業はすべて英語で行われるため、大学内では生きていけるが、北京という街で生きていくためには中国語をマスターしなければならないと強く感じた出来事だった。
私は大学受験に向けて、英語の学習に力を入れたこともあり、語学の習得プロセスを理解しているつもりである。最初に文法を学び、語彙を増やし、実際に会話することでスピーキングとリスニングを同時に身に着けるというものだ。北京ではこれに加え、新しい習得方法を知ることができた。帰国の前日に中国政府奨学金で公費留学をされている方にお話を聞く機会があった。彼女は中国のドラマで中国語をマスターしたということだった。これまで何回か映画を字幕で見て、英語を学ぼうとしたことがあったが、勉強と休息する時間の区別があいまいになることを恐れて敬遠していた。しかし、大学受験が終わった今は点数を取れるというような正しさより、伝わる言語能力を優先する必要がある。中国のドラマや映画にも手を伸ばして、楽しく効率よく中国語を学習したい。
そして、学習を続けるときに必要となるものはモチベーションである。そこで二つの計画を立てた。一つ目はＨＳＫの 4 級を取得することである。これは中国政府奨学金の応募に必要だということで、毎日少しずつテキストを進める。二つ目は再度訪中することである。たくさんの都市を訪れて、中国の人々と中国語で会話したい。いずれも来年の夏までに達成する。
今回の訪中団に参加したことで、中国留学への思いはより一層強まった。この情熱を忘れないように今日も努力したい。

「百聞不如一見」
1-B 横浜市立大学 渡邊愛美

今回の訪中団で初めて中国を訪れた私は、自分自身の五感を通して様々なことを肌身で感じ、中国の文化や歴史に関して多くのことを学んだ。
私が中国に興味を持ち始めたのは、高校を卒業してすぐの頃だった。私は山梨県富士河口湖町出身であり、現在河口湖町では外国人観光客、特に中国人観光客のオーバーツーリズム問題が発生している。国際的な都市計画について大学で学んでいる私は、そのような問題を解決するためにはどのような対策が必要なのか、また中国人はどのような行動原理を持っているのかを考えるようになった。その過程で中国の人々の生活や文化をまず知ってみようと思い、今回の訪中団への参加を決意した。
中国に入国してからは驚きの連続だった。まず、上海では大きな建物が並ぶ中でも一際目立つ上海タワーを訪れた。訪れた日は空が雨模様だったというのもあるが、あまりにも高すぎてタワーの全貌が見えなかったのだ。これ程までに大きな建築物を見たのは生まれて初めてだったため、口を呆けてしまう程度肝を抜かれた。また、上海博物館には、世界史の資料集に乗っていたような中国の歴史的な遺物がたくさん展示されていた。私は高校の時分から世界史が好きだったため、「これ、資料集のあのページに載ってたやつだ！」とさながら某学習教材の学生のようになってしまった。実際に自分の目で見て中国の歴史を学ぶのは非常に楽しかった。
次に訪れた四川省成都では、成都大熊猫繁育研究基地で初めてパンダとご対面した。特に 1 歳のパンダはまだ体が小さく丸々としたフォルムで、非常に可愛かった。三星堆博物館では、中国文明の歴史を揺るがすような非常に大規模な遺跡に関して、様々なことを学ぶことが出来た。ここで非常に印象に残っていることは、展示物を見学する中国の人々の姿だった。私は何度か日本でも博物館を訪れたことがあるが、これ程までに祖国の歴史を熱心に見学している人々を見るのは初めてだった。そのような姿を見て、中国人は愛国心がとても強く、逆に日本人は愛国心が弱いのではないかということに気付かされた。西華大学では、日本語を専攻する中国人学生との交流を通じて、中国で生まれ育った彼らがどのように考えどのように生活しているのか、彼らの視座を断片的にではあるが知ることが出来たと思う。
訪中団で訪れる最後の地となった北京では、万里の長城が印象に強い。下から見た万里の長城はどこまであるのか分からないほど長く続いており、中国古代の建築物がいかに大規模であるかを目の当たりにした。時間が短かったため 1 番上まで登ることは出来なかったものの、出来る限り上まで登ることが出来たのは非常に得難い経験であったと思う。また、紫禁城では多くの建物が当時のまま残されている故宮を見学した。特に太和殿は、映画『ラストエンペラー』で見たそのままの色形で、聖地巡礼のような想いで見て回った。清の時代の皇帝が実際に生活し公務を行ったという場をこの目で見ることが出来て、非常に学びの深い見学となった。

今回の訪中団を経て中国に対して抱いた感想は、物事のスケールがとにかく大規模ということだった。特に、街の至る所で見受けられた社会主義思想的オブジェは、いかにこれらの考えが浸透しているのかということをまざまざと見せつけられ、非常に興味深く面白いと思った。また、中国の人々に対するイメージは、思っていたよりも親切で気さくな方が多いということだった。私が訪中前勝手に抱いていた「中国人は冷たい人が多い」というイメージは、日本のメディアから発信される情報から作られたステレオタイプであったということを感じることが出来た。一週間中国を訪れ中国の文化や歴史、人々の生活を肌身で感じた上で、私は日本に対する造詣を深めることも出来たと思う。今まで自分が当たり前だと思っていたものは日本が誇る財産であり、逆に日本が改善するべき点も比較することによって明らかにすることが出来たと思う。この一週間は私にとって様々な学びと気付きを得る貴重な時間であった。今回の経験を活かし、今後も日中友好の架け橋となれるよう努力していく所存である。